

朗読の神話学

— 19世紀アメリカの読書とその文化 —

澤 入 要 仁

はじめに

テキストには永続性がある。それは、保存の容易な「もの」であって、書庫や電子ファイルのなかに存在しつづける。いったん消滅してしまうと如何せん再現できないが、そのようなことのないかぎり、未来永劫いつでも手にとって利用可能だ。しかるに一方、読書というのは「こと」である。それは、はかない行為であって、その行為の瞬間、あとかたもなく消滅する。じつにとらえがたく、手にとることもできない。そのため歴史にも直接その痕跡を残すことはまれであって、かりに歴史に記されることがあるとしても、それは文章や絵に置きかえられたものである。読書そのものではない。読書は書庫や冷凍庫のなかに保存することができないのである。このように考えてみると、過去の読書を研究することは、過去のテキストを研究することよりもはるかに難しいということが容易に想像つく。

本稿は、そのような困難のなか、あえて読書という、はかなくとらえがたい行為を論じたものである。それは、文化としての書物を検討するとき、テキストそのものに注目するよりも、書物の享受のされかた——つまり読者による読まれかた——に注目すれば、今までとは違った光をその書物に投げかけることができるのではないか、と考えるからである。¹ いいかえれば、書物という文化の生成（すなわち執筆）でもなく、その内実（すなわちテキスト）でもなく、その消費（すなわち読書）に光を当てることによって、書物そのものというよりむしろ、書物をとりかこんだ文化に注目することができると思うからである。

そこで本稿では、19世紀のアメリカ人が読書をめぐって、無意識のうちに信じていたことや期待していたことの一端を探りたい。現代の受験生ならば、参考書を購読することによって、学力の向

1 このように述べれば、1980年代に盛んになった読者受容理論が思い出されるかもしれない。スタンリー・フィッシュやウルフガング・イーサーたちが中心になったこの理論は、ニュー・クリティシズムがテキストに内在する意味を重んじたのに対して、テキストの意味を読者の側に引き戻し、意味はテキストのなかにはなく読者のなかに生ずる、と説いた。けれども、結局のところ彼らは仮想的な読者を机上に想定し、そのような読者が把握すると考えられる意味を研究したにすぎなかった。彼らの反面教師であったはずのニュー・クリティックたちが、時空を越えたものとしてテキストを奉ってしまったように、彼らは時空を越えた読者というものを崇敬してしまったのである。しかし、本稿は彼らとは方向を異にする。本稿では、理想的に仮想された読者の解釈を探るのではなく、現実の読者が共有していたと思われる考え方を明らかにしようとしている。なお、読者受容理論に関しては、たとえば Jane P. Tompkins, ed. *Reader-Response Criticism: From Formalism to Post-Structuralism* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1980) を参照。フィッシュやイーサーに対する批判に関してはたとえば James L. Machor, "Introduction: Readers/Texts/Contexts," in *Readers in History: Nineteenth-Century American Literature and the Contexts of Response*, ed. James L. Machor (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1993), pp.vii-xxix 参照。

上を期待するだろう。ハーレクイン・ロマンスの愛読者ならば、現実からの遮断を望む場合が多いだろう。² では、19世紀のアメリカでは読書に何を求めたのだろうか。もちろん、その答えはひとつではないはずだ。けれども、そのひとつでも掘りおこすことができれば、それは大きな意義があることにちがいない。本稿の第一の目的は、そのような読書をめぐる文化に日の目をあてることである。そして、そうすることによって、書物やテキストに新しい意味を見いだしたいと考えている。これが本稿の第二の目的である。

ところで、読書ははかなくとらえがたい行為であるだけでなく、じつに多様な行為である。日本語の読書は書物を読むことをさすが、英語で reading といえ、根本的には、文章をたどりその意味を理解することをさす。しかし文学研究者なら、「解釈する」の意味にも使うだろう。記号論者であれば、文章だけでなくさまざまな記号を「解読する」行為を reading と呼ぶだろう。まことに懐ふところの深い言葉である。

これまで読書の歴史を調べた研究者たちは、そのように多様な読書を、たとえば「修道士的読書」と「学者的読書」とに分類した。³ あるいは「集中的読書」と「拡散的読書」とに分類した。⁴ けれども私は、読書という行為のなかで、朗読と黙読という読書に興味がある。同じテキストでも書物が異なればその読み方も異なるように、同じテキストや同じ書物でも、黙読するか朗読するかによって、大きな相違が生まれるのではないかと思われるからだ。⁵

本稿ではまず、広く読書の歴史から説きおこし、アメリカでは音読・朗読という読書法が20世紀初頭まで連綿と続いた重要な読書法だったということを示す。つづけて、その背景にあったと考えられる聖書とその読書について分析する。そして、朗読は、黙読と違って、親交を深めるため、あるいは親交を示す読書法だったことを明らかにする。さらに朗読は、親交を深めるためだけでなく、愛情を交わしたり、癒しを与えたりする効果さえあった。そのような効果が科学的に実証しうるも

2 Janice A. Radway, *Reading the Romance: Women, Patriarchy, and Popular Literature* (Chapel Hill: The University of North Carolina, 1991), pp.86-118.

3 Ivan Illich, *In the Vineyard of the Text: A Commentary to Hugh's Didascalicon* (Chicago: The University of Chicago Press, 1993). イリイチは、12世紀までの、いわば本の「ぶどう畑」のなかを巡礼するような読書を「修道士的読書」、それ以降の、知識を拾い集めるような読書を「学者的読書」と呼んだ。ただしイリイチが研究した12世紀フランスのスコラ学者サン・ビクトールのフォーゴーは、読書には、「教える人の読書」（つまり朗読）と「ひとりで瞑想する人の読書」（つまり黙読）のほかに、「学ぶ人の読書」（つまり教師の朗読を聴いている人の読書、いわば聴読）の三種類がある、と説いていた。Ibid., p.87.

4 Rolf Engelsing, "Die Perioden der Lesergeschichte in der Neuzeit," in *Zur Sozialgeschichte deutscher Mittel- und Unterschichten* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1978), pp.112-54. エンゲルジンは、ドイツでは18世紀末に「読書革命」が起こったと論じた。これは、この時代に書物が急激に増えたために読書が激変したという考え方だ。すなわち、それまでの、ごく少数の書物を反復的、献身的に読んでいた「集中的」読書から、多くの雑多な本を読みあさる「拡散的」読書に変わっていったというのである。なおエンゲルジנגに対する批判に関してはたとえば Cathy N. Davidson, *Revolution and the Word: The Rise of the Novel in America* (New York: Oxford University Press, 1986), pp.70-79参照。

5 なお、朗読に近い言葉として、音読という言葉もある。ふつうの日本語の使い方から考えると、朗読は上手に音読することを意味していると思われるが、本稿では基本的に、朗読は聞き手がいる音読、音読はさらに広く、聞き手がいない音読を意味していると思われる。ただし、英語に翻訳すれば、そのような音読も朗読も、ともに reading であることから分かるように、両者に大きな違いを認めることは難しい。じっさい、倉澤栄吉のように、音読と朗読の相違に意義を認めていない研究者もいる。倉澤栄吉「音読・朗読指導新論」『高大国語教育37』平成2年、1頁。また、両者を上記のように区別しても、両者には、本稿で論じる「神話」に関して共通する部分もある。したがって、本稿では、朗読と音読とのあいだに上述のような差異を意識しつつも、その差異をことさら強調することはしない予定である。

のなのか不明だが、少なくとも19世紀のアメリカ人たちは、そのような「神話」を信じていたのである。⁶

リサイティングの朗読・ディコーディングの朗読

近年、日本では音読や朗読がとみに話題である。たとえば、寅さん映画の監督として有名な山田洋次監督が、時代小説作家藤沢周平の作品を有名俳優たちに朗読させたCDが発売された。⁷あるいは、東北大学の川島隆太教授が、音読は脳を活性化させると唱え、さまざまなドリルや啓蒙書を出版している。⁸また、齋藤孝という教育学者が『声に出して読みたい日本語』という本を出してベストセラーになった。⁹さらに、近年、各地の図書館を中心にして、「読み聞かせ」の運動が起こっている。これは、幼児たちに本を読み聞かせようという運動で、ボランティアやNPOが活躍中だ。この「読み聞かせ」という名詞は、10年ほど前にはあまり聞かなかった言葉であるが、この活動が盛んになるにつれ、すっかり定着してしまった。同時に、この活動は、この名称を得ることによって、いっそう盛んになったともいえるだろう。

ここ数年の朗読人気について紹介したが、じつは朗読への興味はここ数年に限ったことではない。たとえば平成8年には国文学者の坪井秀人が、戦時中に放送されたラジオ朗読について優れた研究を発表していた。¹⁰平成5年には、それまで数年かけてシェイクスピア劇をすべて朗読した荒井良雄がその体験をまとめた本を出版している。¹¹あるいは、昭和20年代末以降、学校の国語の授業で、「表現読み」や「朗読劇」の授業が行われてきた。これは、感情を込めて上手に読むことを学んだり、戯曲や小説を数人で、演技ぬきの朗読によって披露したりする授業である。さらに、明治以降、外国語を学ぶときに、多くの生徒・学生たちが、音読しながら勉強してきた。江戸時代の寺子屋で行われた素読もおもしろい教育だった。子供たちは、意味が分からずに四書五經の漢文を朗誦して

6 19世紀のアメリカにおける音読・朗読を検討した研究はない。ただし本稿のいうリサイティングの朗読に関しては、ジョン・シェリー・ルーバンの研究がある。Joan Shelley Rubin, “‘They Flash upon That Inward Eye’: Poetry Recitation and American Readers,” *Proceedings of the American Antiquarian Society* 106 (October 1996): pp.273–300; Joan Shelley Rubin, “Listen, My Children: Modes and Functions of Poetry Reading in American Schools, 1880–1950,” in *Moral Problems in American Life*, ed. Karen Halttunen et al. (Ithaca: Cornell University Press, 1998), pp.261–81; and Joan Shelley Rubin, “Modernism in Practice: Public Readings of the New Poetry,” in *A Modern Mosaic*, ed. Townsend Ludington (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2000), pp.127–52. なお、16世紀から17世紀にかけてのヨーロッパにおける音読・朗読については、William Nelson, “From ‘Listen, Lordings’ to ‘Dear Reader,’” *University of Toronto Quarterly* 46 (1976–77): pp.110–24; Roger Chartier, “Leisure and Sociability: Reading Aloud in Early Modern Europe,” trans. Carol Mossman, *Urban Life in the Renaissance*, ed. Susan Zimmerman and Ronald F. E. Weissman (Newark: University of Delaware Press, 1989), pp.103–20などを参照。

7 寅さんの妹さくらを演じた倍賞千恵子らが朗読を担当している。倍賞千恵子他朗読CD『山田洋次が選ぶ藤沢周平傑作選』新潮社、2004年。

8 いずれも、たいへんなヒットになった。代表的なものとしては、川島隆太『脳を鍛える大人の音読ドリル』くもん出版、2003年。

9 この本は、古今の名文を集めて、それを音読しようという本で、おもしろいアンソロジーにもなっている。齋藤孝『声に出して読みたい日本語』草思社、2001年。

10 坪井秀人『声の祝祭』名古屋大学出版会、1997年。

11 荒井良雄『朗読シェイクスピア全集の世界』新樹社、1993年。

覚えたのである。意味はあとになってから分かればよいという考え方だった。¹² もっとさかのぼれば、仏教が伝来して以来、僧侶たちが仏典を唱えてきたことも含めていい。このように顧みれば、音読・朗読に対する興味や実践は古くから現在に至るまで続いていることになる。

けれども、上で紹介した音読・朗読は、そのほとんどが、上手に表現することであったり、記憶するための手段であったりするものばかりだ。すなわち声に出すことが第一義の読書法だったと思われる。それは、しばしば、芝居がかったパフォーマンスに近いものになりやすい読み方だ。換言すれば、それは、声で「書く」ような読書であって、外に向かってなされている読書である。あえて造語を使うなら、「外読」といってもよいかもしれない。そこで本稿ではこのような読み方をリサイティングの音読・朗読と呼びたい。recite とは、「朗誦する」という意味であって、どこかパフォーマンスを想起させる意味を持った言葉である。(現代では主に「演奏会」を意味するリサイタルという語もこの recite に由来する。) 近年、注目されている音読・朗読は、このリサイティングの音読・朗読が多いと考えていいだろう。¹³

しかし、かつて、もうひとつの音読・朗読があった。それは、いま忘れられている読み方であり、上のリサイティングとちがって、もっと日常的、もっと習慣的な読み方だった。そしてふつうの黙読と同じように、意味を理解することを第一義にしている読み方だった。いわば、眼だけでなく、声でも読んでいる読書だった。それは、意味を内側に取りこもうとする読書であるから「内読」といってもいい。本稿では、このような読み方をデコーディングの音読・朗読と呼びたい。decode とは「解読する」という意味である。ふつうの黙読が、解読を第一に行っているように、この音読・朗読も解読を第一に行っている読書法である。

もちろん、すべての音読・朗読を、このリサイティングとデコーディングに、はっきり二分できるわけではない。あいまいな中間的領域がたくさんある。けれども、本稿で論じる音読・朗読と、現在話題を集めている音読・朗読との間には、やはり質的な相違を認めざるをえない。したがって、あいまいなグレイゾーンを残しながらも、何らかの分類を試みることは無意味なことではないはずだ。あえて、この分類を提示しておくことによって、かつて、現在の音読・朗読とは異なる音読・朗読が存在していたことに注意を促したい。

読書の歴史

19世紀アメリカにおける朗読を論じる前に、ここで読書の歴史を簡単にまとめてみよう。

じつは、現代からみると奇妙なことだが、古代ヨーロッパ人にとって、黙読は不可能ではないに

12 安達忠夫『素読のすすめ』講談社現代新書、1986年。

13 現代のアメリカの書店や大学ではしばしば、詩人たちが新作を朗読する催しが開かれるが、そのような朗読も、リサイティングの朗読の代表的な例である。なんとすれば、自作を読む詩人たちは、もっぱら外に向かって表現しているのであって、内に向かった「解読」はほとんど行われていないからだ。

しても珍しい読み方だった。¹⁴ というのは、古代ヨーロッパでは、文字は音符・楽譜のようなものだったからだ。それは記録の手段であって、表現の手段ではなかったのである。現在の小説家が文字を書くのは、表現そのものためであるが、現在の作曲家が自分の作品を楽譜に残すのは、表現のためというより、むしろ記録のためであろう。それと同じだったのである。すなわち、音符や楽譜が、音にして初めて意味を持つものであるように、文字は、音にしてはじめて意味を持つものだった。それは音にしないかぎり、単に記録された記号でしかなかったのである。¹⁵

それでは、なぜ黙読は難しかったのだろうか。それは、当時の文章の書き方に原因があった。じつは当時の文章には、句読点がなく、単語と単語のあいだのスペースもなかった。すなわち、ローマでは大文字だけが並べられて書かれ、ギリシャでは、大文字と小文字があったものの、その見分けがつかない文字が羅列されていた。そのため、黙読が難しかったのである。というのは、読者は、声の力を借りることによって、まずは音節の区切りを探し、次に単語の区切り、そしてセンテンスの区切りを探しながら読み進めなければならなかったからである。黙読ではそのような区切りを探すことが困難だった。

ところが7世紀になると、単語と単語の間にスペースを入れる分かち書きがアイルランドで始まった。その工夫は仏独を経由して南下し、13世紀までにはヨーロッパで標準的な書き方になった。この分かち書きによって、ようやく黙読が容易になったのである。¹⁶

もちろん音読から黙読への移行はゆるやかで時間がかかった。けれども15世紀に発明された印刷機によって普及した書物はすでに分かち書きされていたのだから、15世紀以降は当然、黙読が加速度的に普及していったと考えられる。¹⁷ では、そのように黙読が広まったのち、音読・朗読はどうなったのだろうか。黙読の普及に反比例して、消えてしまったのだろうか。美留町義男によれば、ドイツではゲテ時代の18世紀後半から19世紀初頭にかけて音読と黙読の位置関係が逆転したという。¹⁸ しかるにアメリカでは、音読・朗読は、後述するように20世紀初頭まで連綿と続いた重要な読み方だった、と私は考えている。

14 古代および中世ヨーロッパにおける音読に関する先駆的研究は Joseph Balogh, “Voces Paginarum,” *Philologus* 82 (1926–27): pp.84–109, 202–40; G. L. Hendrickson, “Ancient Reading,” *The Classical Journal* 25 (1929): pp.182–96 である。これに対してノックスは古代ヨーロッパにおける黙読の実例をあげている。Bernard M. W. Knox, “Silent Reading in Antiquity,” *Greek, Roman, and Byzantine Studies* 9 (1968): pp.421–35. 中世ヨーロッパにおける黙読の広まりとその影響に関しては Paul Sanger, “Silent Reading: Its Impact on Late Medieval Script and Society,” *Viator: Medieval and Renaissance Studies* 13 (1982): pp.367–414がくわしい。なお日本では、西洋古典学者の柳沼重剛が黙読の始まりについて探っている。柳沼重剛「音読と黙読——歴史上どこまで確認できるか」『社会情報学研究1』平成5年、1–16頁；および柳沼重剛「音読と黙読——補遺」『社会情報学研究2』平成6年、1–14頁。

15 G. L. Hendrickson, p.184; and Stewart Flory, “Who Read Herodotus’ *Histories*,” *American Journal of Philology* 101 (1980): p.22.

16 Paul Saenger, *Space Between Words* (Stanford: Stanford University Press, 1997).

17 ひろく音声文化と文書文化との関係についてはすぐれた研究がある。Walter J. Ong, *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word* (London: Routledge, 1988; 1st ed. 1982); and Eric A. Havelock, *The Muse Learns to Write: Reflections on Orality and Literacy from Antiquity to the Present* (New Haven: Yale University Press, 1986).

18 美留町義男「音読から黙読へ——ゲテ時代における書籍メディアと読書行為」『ドイツ文学107』平成13年、82–91頁。

音読・朗読から黙読へ

それでは、アメリカでは音読・朗読から黙読への移行がいつごろ起きたのであろうか。いったいいつごろから音読が衰退し、黙読が重視されるようになったのだろうか。これは確かに難しい問題だ。ある日を境に、180度転回したわけではないからである。音読と黙読は長いあいだ、並行して行われてきたからである。けれども、アメリカの雑誌や著作のなかから証言を見いだすことによって、その変化の時期を示すヒントを探ってみたい。

20世紀初頭の出版物をひもといてみると、いくつか興味ぶかい証言を見つけることができる。たとえば1907年の『ネイション』誌には、「(ここマサチューセッツ州) ケンブリッジでは、1907年までに、この音読の技術がすたれてしまっている」という記述があった。年代や地名が含まれていて貴重な証言だ。¹⁹ また、ハイラム・コーソンというコーネル大学教授が、1908年に出版した『声と霊的教育』のなかで、音読に慣れ親しんできた自分の経験を紹介したあと、「私は、そのような(声を出す)読書が利用されなくなってきたことを危惧している。……100人中99人の大学生が……音読の習慣をほとんどもっていない」と述べている。これも世代間の相違が示されていて有益な証言といえるだろう。²⁰ また、1909年の『ネイション』誌にも、「詩は、しだいに教室で勉強するものになってきた。しだいに炉辺で読むものではなくなってきた」と述べられている。ここでいう「炉辺で読む」はもちろん音読・朗読、「勉強」というのは、黙読によって解釈などを学ぶことを意味しているのであって、音読・朗読の減退を指摘しているのである。²¹

以上のような発言は、音読に慣れ親しんで育った人が、音読の衰退を察知した発言である。これらから判断すると、20世紀初頭あたりから、音読が衰退しはじめたといえそうだ。少なくとも、音読の衰退が顕著になったのは、この頃だったといえそうだ。

もちろん、教育界、とくに初等教育界では、音読教育がまだしばらく続いていた。²² 1913年、ルドルフ・ピントナーが、黙読の方が速度と理解度の点で優れているという研究結果を示して注目されたが、この研究の成果を初等教育が取りいれるようになったのは、もう少し後のことだった。²³ たとえば、1919年の『教育』誌をみると、「本や雑誌、新聞から知識を得るためには、音読はほと

19 "The Pleasant Practice of Reading Aloud," *The Nation* 85 (1907): p.559.

20 Hiram Corson, *The Voice and Spiritual Education* (New York: The Macmillan Company, 1908), pp.25-26. ちなみにコーソンは、今では忘れられてしまった研究者であるが、このころ熱心に音読の効用を説いていた研究者だ。ただ、その説き方が非常に神がかり的だった。この本のタイトルにもあらわれているように、しばしば精神や命などという概念を持ちだした。そのため、当時でさえ注目を集めたように思われない。

21 Francis B. Gummere, "Poetry and Elocution," *The Nation* 89 (1909): p.453.

22 じっさいアメリカの学校では音読が重んじられていた。19世紀フランスの作家、エルネスト・ルグヴェは、フランスで音読の啓蒙につとめ、『音読に関する小論』という本を著したが、その冒頭で、「音読は、アメリカにおいて、公教育のもっとも重要な要素のひとつになっている」と紹介している。Ernest Legouvé, *Petit Traité de Lecture a Haute Voix* (Paris: Bibliothèque D'Éducation et de Récréation, n. d.), p.1.

23 Rudolf Pintner, "Oral and Silent Reading of Fourth Grade Pupils," *Journal of Educational Psychology* 4 (1913): pp.333-37.

んど使えないものである。…（しかし）黙読教育に関して、まだほとんど何も行われていない」という記事がある。これは、黙読の重要性が認識されていながら、その教育が進んでいないという状況を憂えた発言だった。²⁴ また、1922年に出版された『黙読と音読』という本には次のようにあった。「10年以上ものあいだ、音読を重視する危険性、黙読教育を軽視する危険性を、心理学者たちが指摘してきた。しかし今日の中・上級生の読書指導でもっともふつうのものは、あいも変わらず音読教育だ。」この本は、教育界でまだ音読教育が続けられていると非難し、黙読教育の必要性を訴えた著作だった。それは同時に、黙読教育の試行錯誤がおこなわれはじめていたことを示している。²⁵

学校で使われる、いわゆるリーダーという教科書が変わりはじめたのもこの頃だった。それまでは、18世紀のノア・ウェブスターによるリーダーはもちろんのこと、19世紀にロングセラーを重ねたアレクサンダー・マクガフィー編のリーダーでも、いずれも音読することを前提に編集されていた。そのことは、それらの緒言に記されている。²⁶ しかし、1920年になると、おそらく初めて黙読用リーダーが刊行された。それは、当時の研究をふまえ、子供たちに「ひとりで黙って読むこと」を教えるよう意図されたものだった。²⁷

以上の資料によれば、高等教育や読書階級の間では19世紀末から黙読がすたれてきた。少なくとも多くの識者が気づくほど、その衰退がめだってきた。そして1920年前後になると、その波が初等教育にも及び、1920年代以降、初等教育における黙読教育の立場が上昇していく。より多くの証言を集めて検討する必要があるが、音読・朗読から黙読への移行時期に関しては、以上のようにいえるのではないだろうか。とすれば、ドイツに比べて、アメリカでは黙読への移行が100年も遅かったということになる。これは特徴的な状況といわざるをえない。いったいどのような背景からこのような状況が生まれてきたのだろうか。

聖書と読書

アメリカにおいて音読・朗読が続けられていたことを考えるためには、アメリカが人類の歴史上来まれにみる強固なキリスト教国であったことをもう一度思い起こす必要がある。というのは、聖典は、その存在意義、その内容、その利用法、いずれにおいてもアメリカ人の読書と深く結びついて

24 William C. Moore, "Silent Reading," *Education* 40 (1919): pp.9-11.

25 Clarence R. Stone, *Silent and Oral Reading* (Boston: Houghton Mifflin, 1922), p.1. なお、このような進歩的な本が、19世紀後半のボストン文化を支えてきた老舗出版社ホートン・ミフリン社から出版されたこと自体、象徴的だと思われる。

26 Noah Webster, "Rules for Reading and Speaking" in *An American Selection of Lessons in Reading and Speaking* (1789; reprint, New York: Arno Press, 1974), pp.3-13; and Alexander McGuffey, "Introduction" in *McGuffey's Sixth Eclectic Reader: 1879 Edition* (New York: The New American Library, 1963), pp.25-74.

27 William D. Lewis, and Albert Lindsay Rowland, *The Silent Readers: Fourth Reader* (Philadelphia: The John C. Winston Company, 1920), p.1.

いたからだ。²⁸

アメリカのピューリタンたちは、イギリスにいた頃から聖書を重視してきた。たとえば、18世紀のアメリカを代表するフランクリンの自伝には、イギリス時代の祖先について語った部分があるが、それによると、フランクリンの祖父の祖父は、メアリー女王の時代、椅子の裏側のカバーの中に聖書を隠しておいた。それは家族で唯一の聖書で、読むときは、その椅子を裏返して膝の上に載せて頁をめくり、役人が来ると急いで椅子を戻した、という。²⁹

かようなピューリタンたちは、アメリカに渡ると、「聖書に基づく国家」を作ろうとした。じっさい彼らは、自分たちの行為を聖書の記述になぞらえたくらいだった。たとえば、プリマス植民地の初代総督ウィリアム・ブラッドフォードは、ニューイングランドを「アラビアの砂漠（荒野）」にたとえ、自分たちを「約束の地」カナンに向かうモーゼとみなした。このように聖書の内容にたとえることをタイポロジーという。本来のタイポロジーは、新約聖書の内容が、旧約聖書の記述にもとづいていることをさすが、アメリカでは、自分たちの行為が、旧約や新約の記述にもとづいていると考えた。³⁰

このように、聖書はアメリカにとって特殊な書物だった。それは、値段を付けられているのに priceless（値段が付けられないほど貴重な）だった。出版年が記されているのに、timeless（時間が計れないほど永遠の）だった。すなわち聖書は「本であって本ではなかった。」³¹ アメリカは、たぐいまれなキリスト教国家として、聖書とその読書を重視してきたのである。ヨーロッパ以上に、聖書を「集中的」に読んできたのである。

また、アメリカでは他の書物が少なかったため、聖書を「集中的」に読まざるをえないという事情もあった。たしかにアメリカでも18世紀末から19世紀前半にかけて、いわゆる「読書革命」の波が押しよせ、書物が急速に増えた。1830年から1850年の20年間には、1770年から1830年の60年間の5倍の本が出版されたという統計もある。³² しかし、おもしろいことに、アメリカの読書革命では「拡散的」読書が普及しなかった。「集中的」読書が続いたのである。³³ というのは、書物が増えたとはいえ、まだ書物が貴重だったからだった。19世紀前半の一世帯あたりの蔵書数は、わずか三冊

28 家庭における聖書とその読書に関しては William J. Gilmore, *Reading Becomes a Necessity of Life: Material and Cultural Life in Rural New England, 1780-1835* (Knoxville: The University of Tennessee Press, 1989), pp.257-60; David D. Hall, "On Native Ground: From the History of Printing to the History of the Book," in *Cultures of Print: Essays in the History of the Book* (Amherst: University of Massachusetts Press, 1996), p.31; and David D. Hall, "The Uses of Literacy in New England, 1600-1850," in *Cultures of Print: Essays in the History of the Book* (Amherst: University of Massachusetts Press, 1996), p.55などの先行研究がある。

29 Benjamin Franklin, *Benjamin Franklin's Autobiography* (New York: W. W. Norton and Company, 1986), pp.4-5.

30 William Bradford, *Of Plymouth Plantation 1620-1647* (New York: The Modern Library, 1981), p.71.

31 David D. Hall, *Worlds of Wonder, Days of Judgment* (Cambridge: Harvard University Press, 1989), pp.22-31.

32 Helen Papashvily, *All the Happy Endings* (New York: Harper and Row, 1956), p.35.

33 Cathy Davidson, *Revolution and the Word* (New York: Oxford UP, 1986), pp.72-73.

34 William Gilmore, *Reading Becomes a Necessity of Life* (Knoxville: University of Tennessee Press, 1989), p.50.

にすぎなかったという調査がある。³⁴ 真の意味での拡散的読書は、19世紀後半になって、いわゆるダイムノヴェルや、大衆雑誌が大量に出版されるようになってからといえるだろう。したがって聖書を中心とした聖典の「集中的」読書が長いあいだ継続されたのである。

このように聖書は、特殊な存在であり、かつ貴重な存在であったため、アメリカの読書に影響を与えたのだが、その内容もアメリカの読書に影響を与えてきた。読書と関わる聖書の内容的特徴をここでもう一度、確認してみよう。

聖書の第一の特徴は、言葉というものを重視していることである。sola scriptura（聖書によってのみ）という表現があるように、キリスト教では、神の言葉、すなわち聖書のなかだけに真実がある、と考えられていた。じっさい聖書のなかにも「言葉」を重視した部分がある。たとえばヨハネ伝の冒頭に、「^{はじめ} ^{ことば} ^{とも}太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。この言は太初に神とともに在り、^{よろず} 萬の物これ（＝言）に由りて成り、成りたる物に一つとして之（＝言）によらで成りたるはなし」とある（1:1-3）。もちろんこの一節は、創世記冒頭にもとづいていて、神が「光あれ」など言葉を発することによって天地を創造したことをさしている。しかしおもしろいのは、神ひとりが天地創造をみちびいたのではなく、神とともに存在していた言葉も同じく天地創造をつかさどった、とさえいっていることだ。神だけが主体ではなく、言葉も主体だった、というのである。神と言葉とは別個の存在ではなく、神が作った天地万物は、言葉が作った天地万物でもある、といっているのである。

英訳聖書を調べてみると、さらに驚かされる。というのは、言葉が神と同一視された結果、「言葉」をさす代名詞が it ではなく、he や him になっているからである。（He was with God in the beginning. Through him all things were made: without him nothing was made that has been made.）これは英語としてきわめて特徴的な使い方である。けれども、よく考えてみれば、代名詞のこの特徴的使い方によって、神と言葉が一体であることがたくみに象徴されているといえるだろう。もちろん、原文のギリシャ語で使われている *logos* は男性名詞であるし、この *logos* はイエスとも結びつけられて考えられてきたという背景もある。しかし、現代英語に翻訳された新国際訳においてさえ、言葉を意味する *logos* が、he や him で指示されていることは、見すごすわけにはいかない。聖書における言葉というものの重要性が、聖書のこの一節に、もっともよく表されていると考えられる。

それでは聖書でいう言葉とは何のことだろうか。それは音声のことであって、文字のことではなかった。これが第二の特徴である。じっさい聖書は、その大部分が、神のおこなった御業や神が語った言葉を記録したものだ。あるいは預言者や使徒たちの体験や、彼らが神と交わした言葉を記録したものだ。すなわち、聖書は心のなかや考え方を論述した文書ではなく、発話や物語を記録した文章なのである。列王紀略や歴代志略などの歴史記述部分はあるものの、それ以外は語りを記録した文章なのである。

音声が必要であったということは、たとえばロマ書10章17節に表れている。そこには「斯く信仰

は聞くにより、聞くはキリストの言による」とあった。つまり信仰は、文字を読むことによってでもなく、靈感を受けることによってでもない。音声、特にキリスト（神）の音声を聞くことによっではじまる、というのである。ということは、布教・宣教にも音声が重要であった。聞く耳を持たない人々に神の福音を伝えることはできなかつたのである。

したがって、そのような聖典のもっともふさわしい読み方は声を出して読むことだった。聖典の言葉は、その多くが音声を記録したものだから、音読によって神の声を眼前に現出させることができたのである。それは、ちょうど、預言者の口から神の声が現れるのと同じだった。また、イスラエルの民が、神の福音を説く聖徒たちに耳を傾けたのと同じように、アメリカ人は、聖典を音読することによって信仰を深めることができた。こう考えれば、聖典は、黙読という読書がまだ一般的でなかったから音読されてきたのではなく、音読されるべき内容であったから音読されてきた、という事情がよくわかるだろう。

ここまでくると、聖典の第三の特徴がおのずと明らかになる。それは、聖典の音声を再現するということは、読者が神の口になることであって、神といわば一体化することを意味していた、ということである。たとえばエレミヤ記に次のような一節があった。「エホバ遂にその手をのべて我口（＝エレミヤの口）につけエホバ我（＝エレミヤ）にいひたまひけるは視よわれ我言を汝の口にいれたり」（1:9）。神はその手をエレミヤの口につけることによって、エレミヤに言葉を授けたのである。この接触行為によって二者の合一が示唆されていて、まことに印象的だ。じつはイエスも十二使徒を送りだすとき、「言ふべき事は、その時さづけらるべし。これ言ふものは汝等にあらず、其の中にありて言ひたまふ汝らの父の霊なり」（マタイ伝10:20）といって、使徒たちが言葉、音声を通して聖霊と交わっていることを説いていた。これらの記述から考えると、声を出して聖書を読む者は、いわばエレミヤになることができた。いわば十二使徒のひとりになることができた、といえるだろう。

聖典の最後の特徴は、その読書の形態である。聖書は毎朝、あるいは毎夕、家族でその一節が朗読された。それは、信仰を子供たちに教え、信仰を共有するための朗読だった。もちろん聖典が稀少だったから、そして文字を読めない人もいたから、というのも朗読の大きな理由だった。しかしそれよりもむしろ、朗読すれば、朗読者と神だけでなく、聞いている読者も、その信仰の話のなかで結びつく。だから朗読されたのである。

また、子供たちにとって、家族による聖典の音読がリテラシーへの道になった。子供たちは、文字を読めないころから聖典の重要な言葉、とくに教義問答カテキズムを暗誦してしまった。そして、次第に、その耳と口で覚えた言葉を、文字の上でたどりはじめ、そうすることによって文字を覚えていった。たとえば、ジョゼフ・バッキングラムという19世紀ボストンの編集者は、小さい頃から聖典の音読を聞いていたので、いつのまにか文字を覚えていた。5歳の時にはすでに読めていた、という。³⁵ このよ

35 Joseph T. Buckingham, *Personal Memoirs and Recollections of Editorial Life* (Boston: Ticknor, Reed, and Fields, 1852)1:11, 16, 19.

うに、耳と口で覚えた言葉を文字の上にたどることによって文字を覚えた子供たちは、文字を読むと、つい口を動かしてしまった。読むときにはつい、音読してしまったのである。

考えてみれば、黙読というのは、読者がひとりで書物に向きあう個人的、私的な行為だ。読者は、自分を冷静に保つことができ、テキストから独立してられる。したがって、客観性が要求される学問研究には、黙読は不可欠なものである。³⁶ しかるに、音読・朗読は、読者のその独立を危ういものにする。極端な場合、読者はテキストに従属してしまうからである。けれども、それは同時に、音読・朗読によって、読者がテキストと一体化できるということだ。音読・朗読の読者は、フランスの思想家ミシェル・ド・セルターがいうように「自分の声を他者（＝著者）の身体にして」読むからである。³⁷ 音読・朗読の読者は、読者であって読者ではなくなってしまうのである。これはまさに、神に帰依する信仰にふさわしい読み方だった。

私はこのような聖典の読書に見られるような音読・朗読をコミュニオン（共有、霊交）の読書と呼んだことがある。³⁸ 音読によって読者と著者（聖典の場合は神）が交わり、朗読によっては、読者と著者とさらに聞いている読者とが交わるからである。そのさい私は、ハーマン・メルヴィルの『モビー・ディック』（1851）、ルイザ・メイ・オルコットの『若草物語』（1868）、ヘンリー・ジェイムズの『ねじの回転』（1898）などのアメリカ文学作品のなかに記録された音読・朗読という読書形態がいずれもコミュニオンの役割を果たしていることを指摘し、その効果を検討した。

本稿ではさらに加えて、あらたな象徴的な例をあげたい。まずはハリエット・ビーチャー・ストウの『アンクル・トムの小屋』（1852）から論じよう。

『アンクル・トムの小屋』

アメリカにおける聖書とその読書を考えるとき、最も重要な資料のひとつが、ハリエット・ビーチャー・ストウの小説『アンクル・トムの小屋』だと思われる。³⁹ もちろん、この小説は奴隷制の悪を訴えた小説として知られている。けれども、それは聖書、とくに新約聖書の読書が、同じくらい大きなテーマになっている小説だった。じっさい、この小説の主要な人物である、奴隷のトム、その主人のセント・クレア、そしてセント・クレアの娘エヴァは、いずれも聖書で結びつき、いずれも最後にイエスのごとく死んでしまうのである。

エヴァから説明しよう。エヴァはしばしばトムに聖書を読み聞かせる。トムもエヴァの朗読を聞くのが大好きだった。エヴァの朗読がたいへん巧みだからである。このようなエヴァは、聖書を音

36 外山滋比古は、このような私的環境のなかで黙読をおこなう読者を「近代読者」と呼んだ。外山滋比古『近代読者論』（みすず書房、昭和44年）55頁。

37 Michel de Certeau, *The Practice of Everyday Life*, trans. Steven F. Renddall (Berkeley: University of California Press, 1984), p.176.

38 澤入要仁「書かれたテキスト・語られるテキスト——『ねじの回転』と朗読」橋浦兵一編『ことばとの邂逅』（開文社出版、平成10年）64頁。

39 Harriet Beecher Stowe, *Uncle Tom's Cabin*, Riverside Edition, (1896; reprint, Tokyo: Hon-No-Tomoshia, 1996), 2:4.

読することによって、だんだんイエスや預言者たちと一体化してゆき、イエスのごとく、トムたちの魂の救済をはかる。たとえば第22章に、エヴァとトムが湖の近くで聖書を読む場面がある。黙示録15章2節の「我また火の混りたる玻璃(=ガラス)の海を見し」という一節を読むのだが、そのときエヴァは夕焼けを映した湖を指さして、「あれこそ、『火の混りたる玻璃の海』よ」という。つまり、エヴァは黙示録を読むことによって、その語り手ヨハネと一体化し、ヨハネと同じように、この世の終末と新しい世界の出現を予感したのである。

一方、エヴァの父セント・クレアは、聖書をあまり読んでいなかった。しかし、娘エヴァを失うと、トムのすすめで聖書を読むようになる。すると、天国や救済を理解しはじめ、トムに対する愛着も深まり、やがて奴隷たちの解放を決心するのである。このように、セント・クレアもイエスと一体化していった。それは、いつも聖書を読んでいるトムがイエスの役割を果たし、セント・クレアを救済したともいえるだろう。セント・クレアはまもなく、けんかに巻き込まれ、瀕死の重傷を負うが、その臨終の場面では、トムと手を握りあって文字どおりひとつになる。二人は聖書を読むことによって一体化したのである。⁴⁰

最後にトムについて紹介しよう。トムは文字をゆっくりと読むことができる。そして聖書を介してエヴァと一体化し、さらには聖書を介してセント・クレアと一体化したのだが、それだけではなかった。トムは、たとえばキャシーという混血の女奴隷にも聖書を読ませ、キャシーとも一体化していくのである。キャシーは最初、「神なんていない」と考える奴隷だった。しかし、トムにいわれて聖書の朗読をはじめると、態度が一変する。最初、威張った態度で聖書を手にとるのだが、「やさしい声で、しかも独特の美しい調子で朗読」をはじめると、その声がふるえ、言葉が詰まる。そして、とうとう身を震わせ、むせび泣きしてしまう。その結果、キャシーはトムに心を開き、自分の境遇を詳しく語りはじめるのである。聖書の朗読によって、二人の心がひとつになった。いや、もっと正確に言えば、聖書の教えと二人の心、この三つのあいだに一体化が成立したのである。トム自身、朗読の持つこのコミュニオンの効果をあらかじめ知っていたようだ。知っていたからこそ、キャシーに朗読させることによって回心させようとしたのではないだろうか。しかも、その作戦はトムの予定通り、見事に成功した。まことに、トムの頭のよさが——その敬虔な信仰心だけでなく、その聡明な頭脳が——如実に示された場面だった。⁴¹

交わる声・交わらない声

朗読が読み手とテキストとさらには聞き手とを一体化させると述べたが、この一体化は、必ず成立するものではなかった。親密性、共通性がなければ、朗読が作るコミュニオンに加われないのである。それはちょうど、信仰を共有していなければ、神の言葉と一体化できないことと同じだった。

40 Stowe, 2:61-81.

41 Ibid., 2:136, 138.

たとえば、『緋文字』（1850）で知られるナサニエル・ホーソーン『七破風の屋敷』（1851）を考えてみよう。この小説は、成功を収めた『緋文字』の翌年に書かれた小説だが、非常に暗いところがあって、正直なところ、『緋文字』ほどおもしろい作品とはいえない。けれども、朗読の文化史を考えると、たいへん意味深い資料になっている。

この小説のなかで、老嬢ヘブジバーが兄クリフォードを慰めようと朗読する場面がある。だが、兄は「退屈」してしまう。それは、妹の声や容姿が嫌悪感をさそうためだった。つまり、「美の愛好家であった」兄にとって、妹は堪えられない存在だったのである。だから妹が朗読しても、二人の間に交わりが生まれなかったのである。けれども、そのようなクリフォードは、従姉妹の少女フィービーが朗読するのなら、楽しむことができた。フィービーは朗読しながら、ときにみずから笑ってしまうのだが、すると彼も「共鳴して」笑ってしまうのだった。あるいはフィービーが詩を読むと、「読んだ詩から火が燃え移って」彼の顔で燃えあがるようなときもあった。要するに、彼はフィービーが気に入っていて、彼女の方にも彼に対する無垢の愛情があふれていたのである。だから、朗読によって、二人の心は交わることができたのである。⁴²

この老女ヘブジバーと少女フィービーの対比はたいそう示唆的といえるだろう。同じ朗読でも、お互いに好意のある関係でないと、朗読が成功しないのである。さらに、フィービーが朗読しているとき、ついみずから笑ってしまう、というのも貴重な場面だ。この場面から、フィービーは単に声に出しているのではなく、フィービー自身も読んでいることが分かるからである。単なるパフォーマンスとしての朗読ではなく、自分も意味を理解しながら読んでいる朗読だった。上述したリサイティングの朗読ではなく、ディコーディングの朗読になっていたのである。

朗読が交わりを作るものならば、それが恋愛にも使われることはいわば当然といえるだろう。ここでは、20世紀最初頭の作家、ジャック・ロンドンの小説『マーティン・イーデン』（1909）から、恋愛に使われた朗読を指摘してみたい。

この小説は、ジャック・ロンドンの半自伝的小説といわれている。労働者階級出身の若者マーティン・イーデンが作家を志して格闘する。やがて彼は成功を収めるが、実際のロンドンの自殺を予告するかのように、最後に海へ身を投じてしまう、という物語だ。なお、この作品にはときおりセンチメンタルなところが見られるが、それは自然主義作家でありながら自然主義作家らしからぬロンドンの特徴だった。

この小説のなかで主人公は、名家の女性ルースに一目惚れする。彼は、作品を片はしから出版社に送っているのだが、自信作ができたなら、まずはルースに朗読して聞かせたいと考えていた。ようやく自信作を仕上げたマーティンは、いよいよ朗読するチャンスを得る。二人で自転車に乗って丘へのぼり、そこで朗読するのである。

ルースは、そのとき初めてマーティンの朗読を聞いて、感動のあまり我を忘れてしまった。それ

42 Nathaniel Hawthorne, *The House of the Seven Gables* (New York: W. W. Norton and Company, 1967), pp.134–35, 145–46.

は読まれた作品がすぐれていただけでなく、読んだマーティンの気迫も圧倒的だったからだった。そして、はっきりとは書かれていないが、ルースは愛欲らしきものさえ感じてしまう。すなわち、ルースは朗読をとおして、マーティンと一体化するのである。⁴³ さらに別の日、二人はふたたび丘の上で朗読するのだが、やがて二人とも作品に没頭できなくなる。それは二人が互いを求めあうようになったからだった。その結果、二人は初めてキスを交わす。朗読が二人をキスまで導いたのである。⁴⁴

このような場面がどれくらいロンドンの実体験に即しているのかは分からない。ブルジョワ文化にあこがれていたロンドンの、単なる空想の産物かもしれない。しかし、いずれにせよ、これらの場面は、当時、朗読に期待されていた効果——それが科学的真実であろうとなかろうと、当時、信じられていた神話——にもとづいて描かれたものといえるだろう。

癒す声——むすびにかえて

ここまでくれば、音読・朗読が癒しの効果をも持ちうるということが理解できる。

音読・朗読は、著者と読み手と聞き手のあいだに交わりを作ってくれる。したがって、そのような交わりを求める孤独な人々にとって、音読・朗読は、その希望の交わりを与え、心に平和をもたらしてくれるものだった。つまり、彼らは、音読・朗読によって癒されるのである。

その例は、上で論じた『アンクル・トムの小屋』や『七破風の屋敷』にもみとめられるが、ここでは、19世紀アメリカの国民的詩人ヘンリー・ワズワース・ロングフェローの詩「一日の終わり」(1844)を紹介したい。この詩の冒頭は、夕暮れどき、一日の仕事を終えた語り手が家へ向かう場面から始まる。村の灯りが見えてくる。すると語り手は「ある悲しい感情」におそわれ、誰かれにというわけでもなく、次のように呼びかける。「さあ、私に何か詩を読んでおくれ、／素朴で心のこもった詩を。／この不安な気持ちをなだめ／一日の思いを消しさる詩を」と。⁴⁵

語り手の「ある悲しい感情」というものが具体的に何であるのか明示されていない。しかし村の灯りを見て悲しみにおそわれたということは、おそらく孤独にたえられなくなったのだろう。一日の疲れや一日の苦悩を誰かに癒してほしかったのだろう。けれどもおもしろいことに、彼がそのために望んだ手段は、誰かに詩を読んでもらうことだった。熱いスープを調理してもらうことではなかった。暖かいベッドを用意してもらうことでもなかった。また、好きな詩を自分ひとりで読むことでもなかった。そうではなく、素朴な詩を誰かに朗読してもらうことだったのである。

このような語り手の切ない望みはどのように解釈すればいいのだろうか。なぜ、語り手は詩を読んでもらいたいのだろうか。この詩は、『拾いもの』(1844)というアンソロジーに添えられた序詩^{プロエム}

43 Jack London, *Martin Eden*, vol.13 of *The Works of Jack London* (1909; reprint, Tokyo: Hon-no-Tomosha, 1989), p.126.

44 *Ibid.*, p.175.

45 Henry Wadsworth Longfellow, "The Day Is Done," in *The Complete Poetical Works of Henry Wadsworth Longfellow* (Boston: Houghton, Mifflin and Company, 1899), p.81.

であったから、続く詩編をみちびくための単なるポーズとして、詩を読んでもらうという設定になっているのだろうか。これらのような疑問がわくのは当然である。語り手の願いが現代の読者にとってあまりに奇妙だからである。

しかし、本稿で論じたように、アメリカの読書の歴史、あるいはアメリカの音読の歴史を顧みると、はじめてこの詩の意味が理解できるようになる。語り手は、詩を朗読してもらうことによって魂の触れあいを求めたのである。誰かと一体になりたかったのである。いいかえればロングフェローは、朗読の持つ効果、あるいは朗読が持つと信じられていた効果、すなわち朗読は、読むもの聞くものを交わらせるという神話、をこの詩のなかに利用したのである。そのような神話を前提にして、この詩を書いたのである。その神話を共有していた19世紀の読者たちは、たちどころに詩人の意図を理解したことだろう。語り手に共感したことだろう。

はるかギリシャ・ローマまでさかのぼりながら朗読について探ることによって、ようやく、この短い詩一編を味わうことができるようになった、と私は思う。本稿の冒頭で述べたとおり、読書ははかない行為だ。それが歴史に記されることはまれである。しかも、そのような読書にまつわる神話や常識は、いっそうとらえがたい。わざわざ記録する者がさらに少ないからだ。たとえギリシャ・ローマまでさかのぼることになろうとも、過去のテキストを読むためには、このような神話や常識をあらかじめ掘りおこしておくが、どうしても必要である。